

本日、参加いただきありがとうございます

- 簡単な紹介をお願いします。
- 自己紹介 場所など
- 参加の興味・関心などの根拠などお聞かせください。

1941年(37)~1942年(38歳)

## 日米開戦下のイサム・ノグチ



○ アーシル・ゴーキーとカルフォルニアに行き、日米開戦を迎える。その後、アリゾナの日系アメリカ人の収容所に半年、自主的に半年間入所する。芸術家仲間**フランク・ロイド・ライト**らの嘆願書により出所。その後は、ニューヨークの**グリニッジ・ヴィレッジ**にアトリエを構えた。1942年(38歳)にニューヨークに戻ってから、グリニッジ・ヴィレッジの**マクドガル・アレー**にアトリエを構える。

1942年(38)~1950年(40歳)

日米開戦下のイサム・ノグチのスタジオ

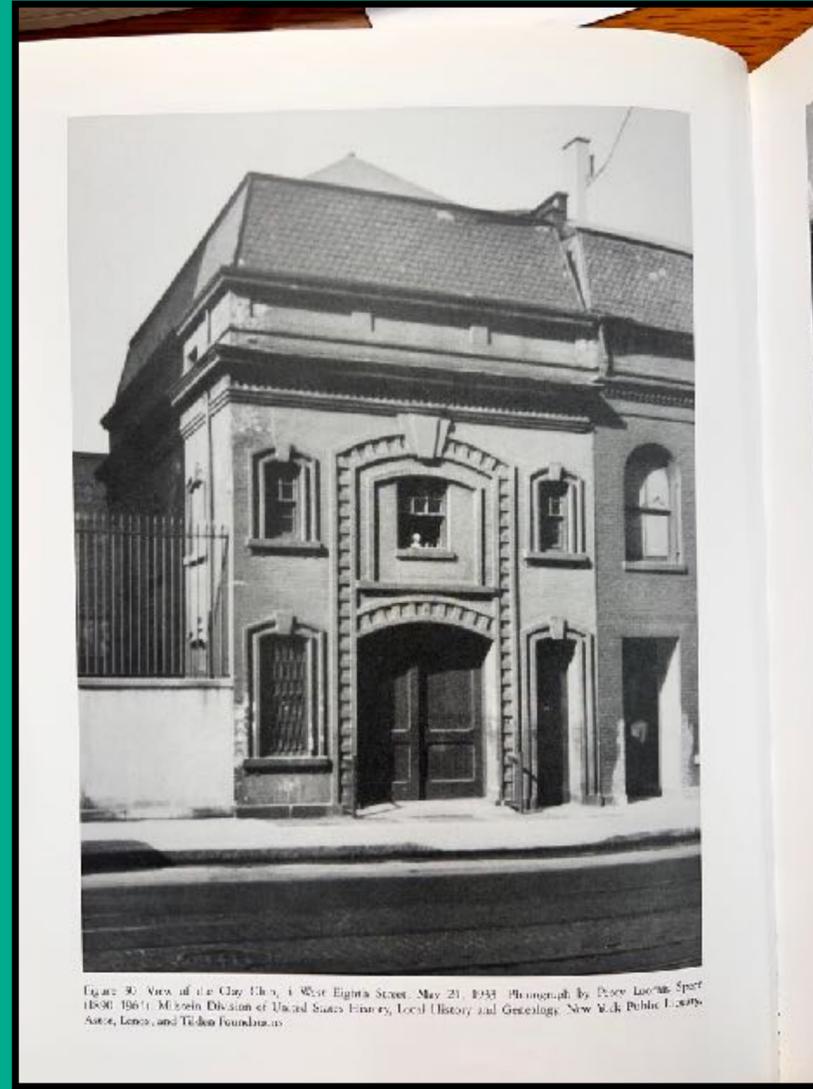
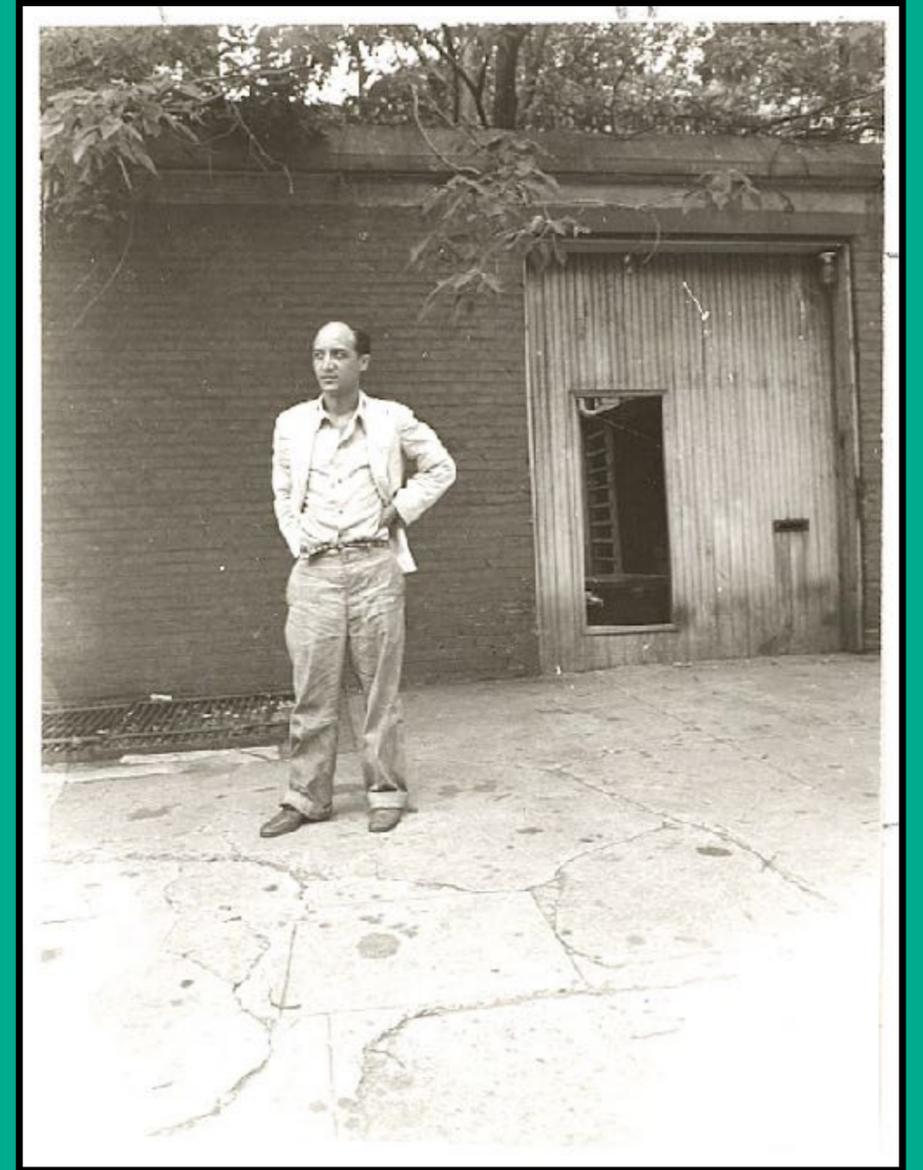


Figure 30. View of the Clay Club, 4 West Eighth Street, May 21, 1933. Photograph by Percy Loomis Spurr (1890-1967). Museum Division of United States History, Local History and Geology, New York Public Library, Astor, Lenox, and Tilden Foundations.

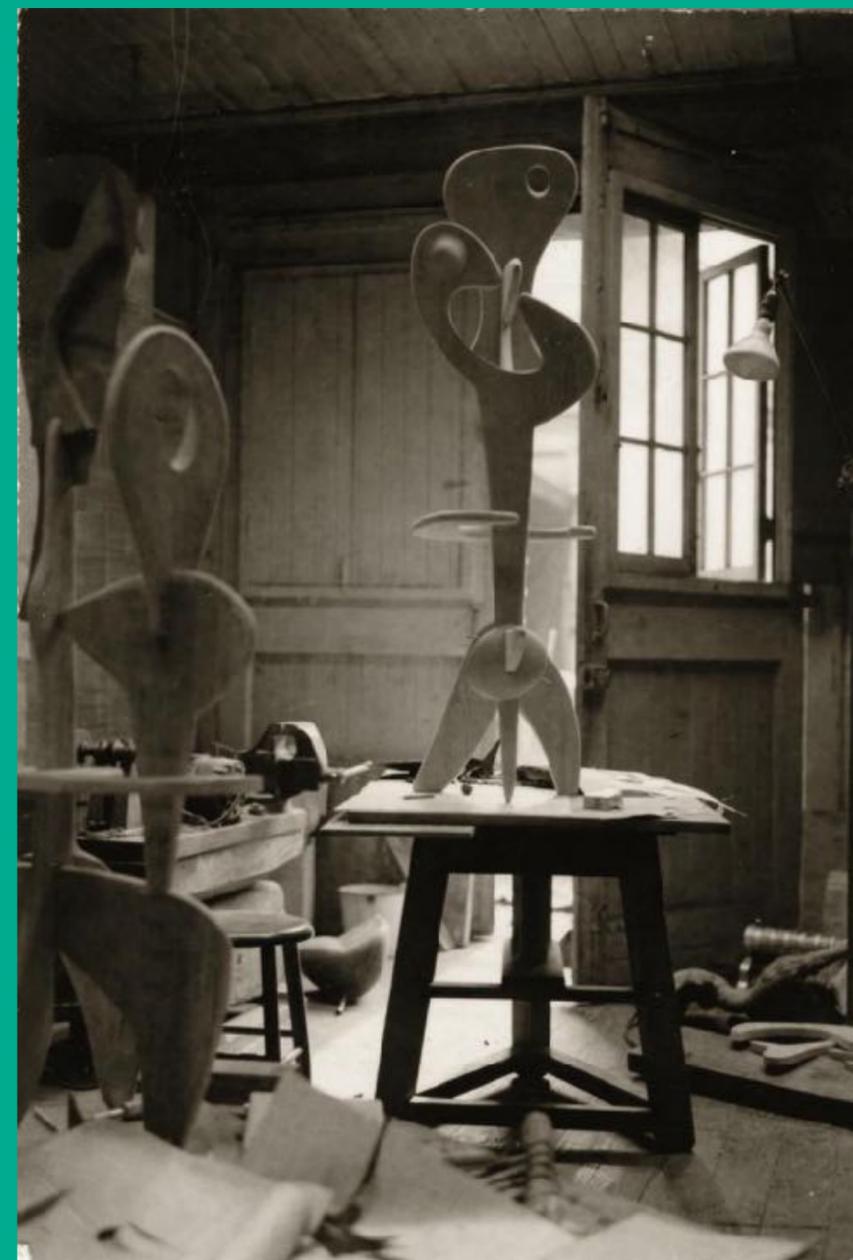
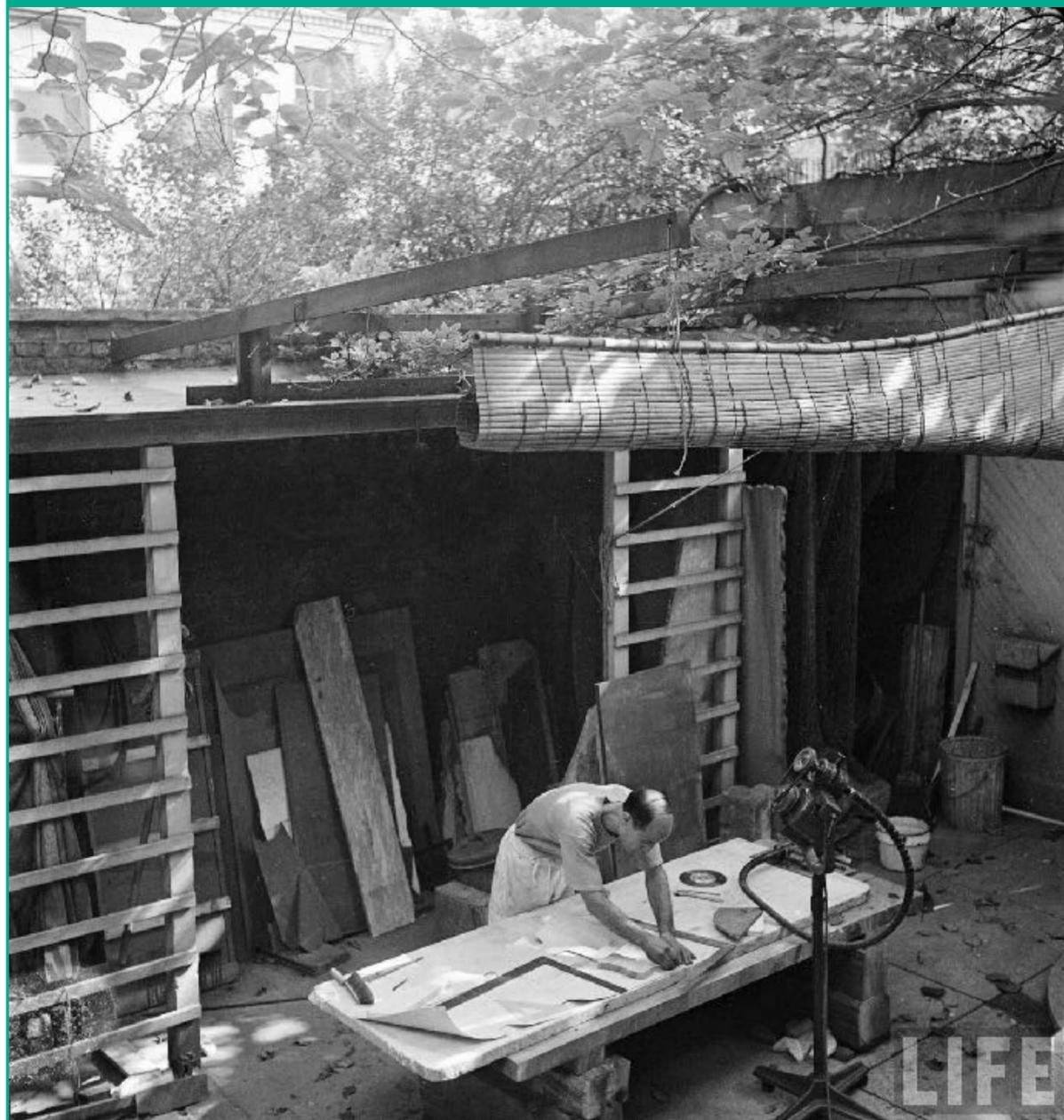
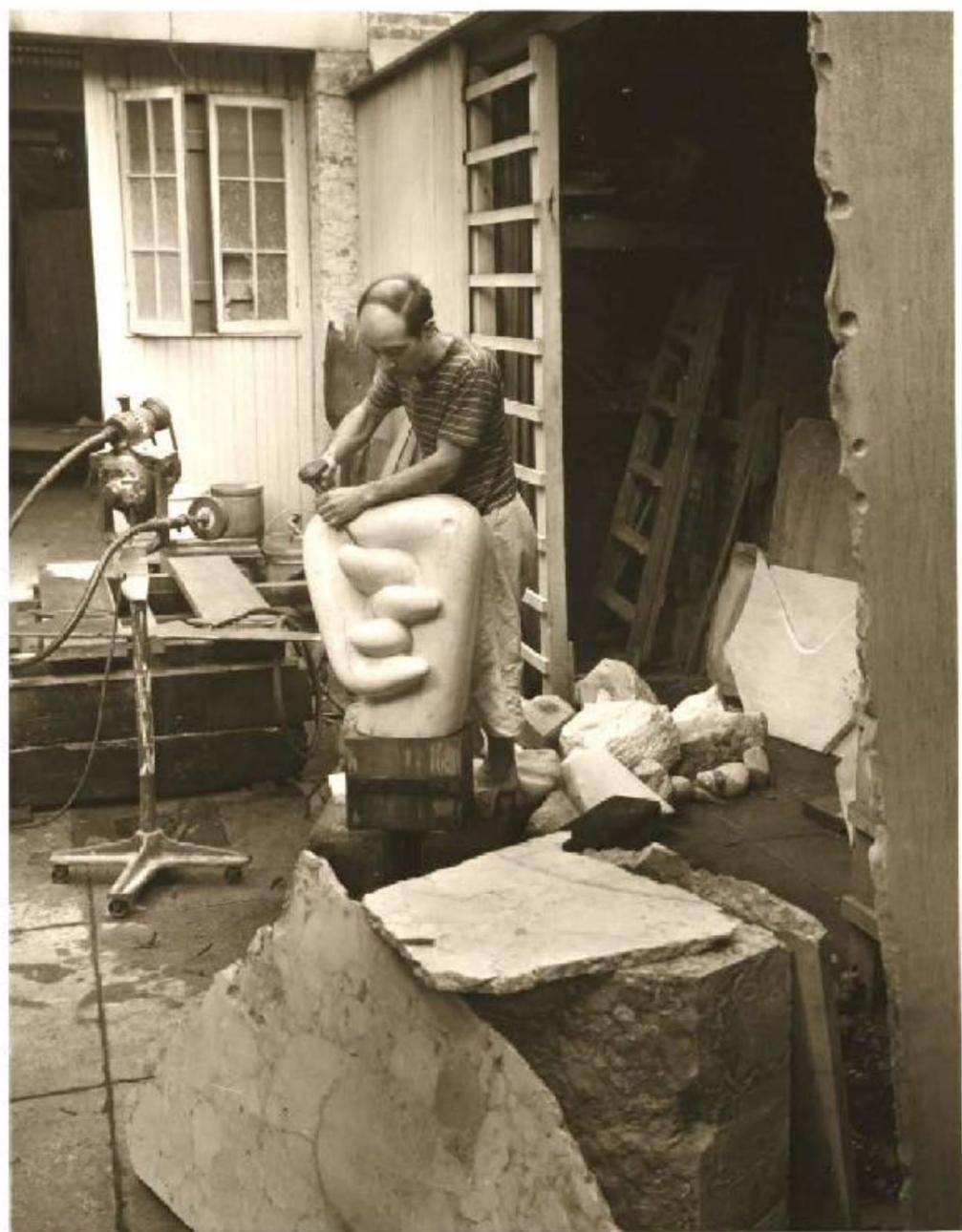


○多くの書籍によると、イサム・ノグチは1942年から1950年までの8年間、マクドゥーガル・アレー33番地に住み、そこで仕事をしていた。彼の「スタジオ」は1階の部屋と、大きな作業台がある屋外の広いスタジオから構成されていた。

○マクドゥーガルアレー33番地は、西8番街4番地の内部と裏に位置していた。そこはかつて馬小屋だったが、現在は彫刻団体のクレイクラブに改装されていた。西8番街4番地のクレイクラブは、5番街と8番街の南西角にあった5番街8番地の家の以前の厩舎(きゅうしゃ・うまごや)でした。これはマクドゥーガル・アレー33番地の入り口前に立つ野口の写真です。写真の左側、レンガの壁の前にある格子状の格子に注目してください。これは上の写真で参照されます。

1942年(38)~1950年(40歳)

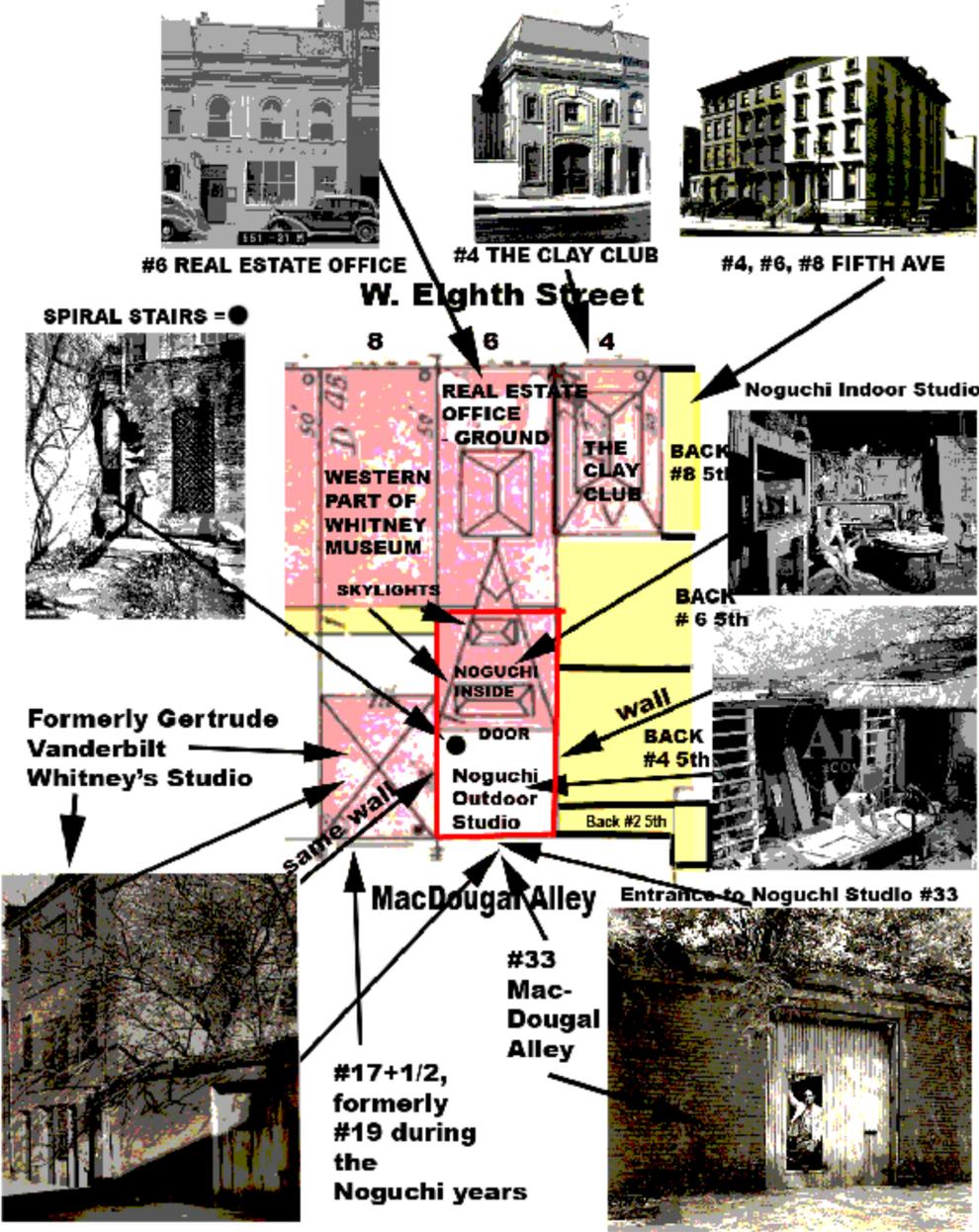
日米開戦下のイサム・ノグチのスタジオ



1942年(38)~1950年(40歳)

日米開戦下のイサム・ノグチのスタジオ

#33 MacDougal Alley - Isamu Noguchi's residence/art studio 1942-1949



この写真群の中央には、野口氏が屋外スペースの左奥にある螺旋階段の頂上近くに立っている写真があります。

ノグチの頭上には傾斜した屋根があり、実は大きな窓で、赤く印が付けられています。これは、西8番街8番地の裏の建物に今も残っている同じ窓です。裏の建物はマクドゥーガル・アレー17番半という名前でも呼ばれています。

これは、野口の屋内と屋外のスタジオが西8番街6番地の裏にあったことを示すさらなる証拠です。



Slanted roof as seen from an apartment being sold in #2 Fifth Avenue



Slanted roof as seen today from 8th Street



Noguchi on a spiral staircase in his outdoor studio space with angled wall from Whitney Museum above him.



NOGUCHI'S former outdoor studio space, now part of #2 Fifth Avenue



Noguchi's backyard studio space with spiral staircase.

1950年~1965年(46~61歳)

出会うの人、ノグチ  
—日本/伝統/モダン—



北鎌倉のアトリエで陶彫をつくるノグチ1952年48歳



かぶと1952年48歳



北鎌倉のアトリエ兼住居1952年48歳

北鎌倉の住居兼アトリエの縁側でくつろぐノグチ 1952年頃



北鎌倉のアトリエの様子。崖の土壁に屋根をかけたもの 1951-52年頃

○ ノグチは、**その師ブランクーンシ**にも似て、器用とか不器用を超えて、対象に潜む深層に直観と肉体的本能でたどり着くことができた。これは訓練して得られたものではない。そこにまた、私たちはノグチの社会や常識との底しれぬ隔絶を感じざるを得ないだろう。それこそがノグチ作品を見る時に私たちが準備していなければならない眼差しなのではないだろうか。つまりノグチにとって、**伝統とは、「見えないものに対する畏怖、その謙虚さ」**のことであったのである。

○ 戦後、ニューヨーク派の中で頭角を現わした気鋭の芸術家として来日したノグチは、今の日本の美術の状況を聞かれて「日本の伝統はどうなった！**ピカソの真似ばかりじゃないか！**」と喝破したという。そして「それなら、僕がやってみせよう」と有言実行したノグチの行動力、胆力には舌を巻く。北鎌倉にあった美の巨匠、**北大路魯山人のアトリエ**の一角に寓居(ぐうきょ)して制作した陶器の彫刻に、当時の日本中が瞠目(どうもく)した。

1950年~1965年(46~61歳)

出会いの人、ノグチー日本/伝統/モダン



山口淑子へのオマージュ1952年48歳

○ ノグチ作品には、女性へのオマージュが多い。

それは彼が女性性への強烈な憧れを制作のもとになる情熱に据えていた一つの証でもある。実際に結婚もし、当時「夫人」であった**山口淑子**へのオマージュした作品はまた、別格的な存在だ。林の中の樹か、水草が揺れるような「動き」のある舞踏的造形でユーモアもたっぷり。満州で製作された映画に多く主演した彼女が、**女優李香蘭**

(**リ・こうらん**)として歌って日本で大ヒットした曲が、タイトルになっている。

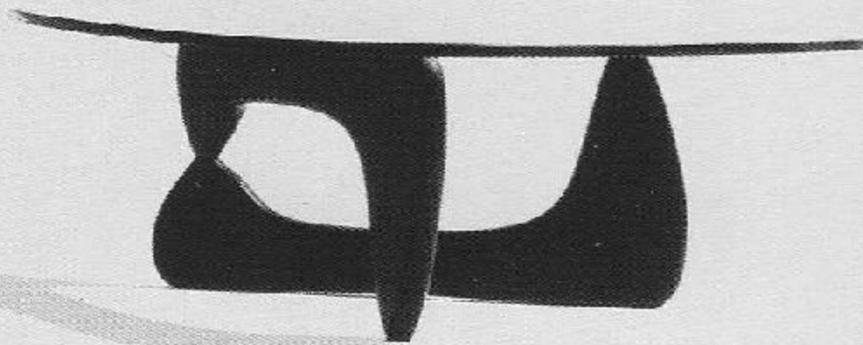


三本足の花器 1952年(48歳)

○ 「今の日本の美術の状況をどう思うか？」と聞かれた彼は、「ピカソの真似ばかりでくだらない。日本の伝統はどうしたのだ！」けんけんがくがくと一刀両断して、喧々諾々の言い合いにもなったと伝えられている。当時の「ピカソの真似」は、関西の具体を中心とした、フランスの**アンフォルメル**など戦後の新しい抽象の運動に呼応した動きを指したのだろう。「ならば、俺がやってみせよう」総合芸術の巨匠、**北大路魯山人**の**北鎌倉の窯場**の一角で焼きものによる彫刻の制作を始めた。

1947年~1952年(43~48歳)

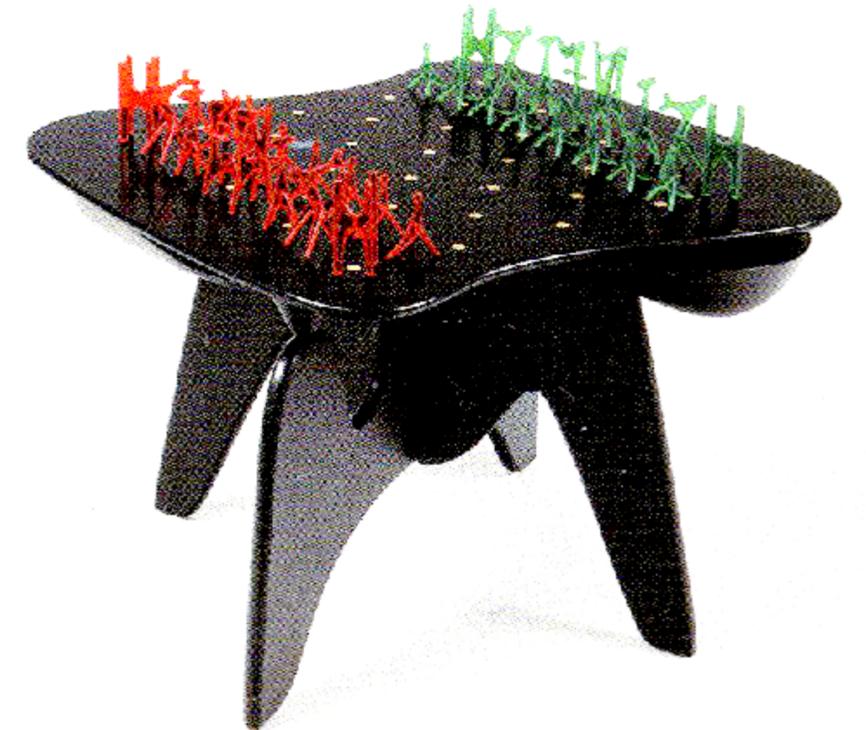
出会いの人、ノグチ  
—あらゆる物質を彫刻に—



コーヒーテーブル  
1944年(製造=1947-73年、1984年-現在) 木、板ガラス



ティーカップと受け皿の習作 1952年 Photo by Kevin Noble



チェスセットとテーブル1947年43歳

○ 1944年コーヒーテーブルとして制作された。

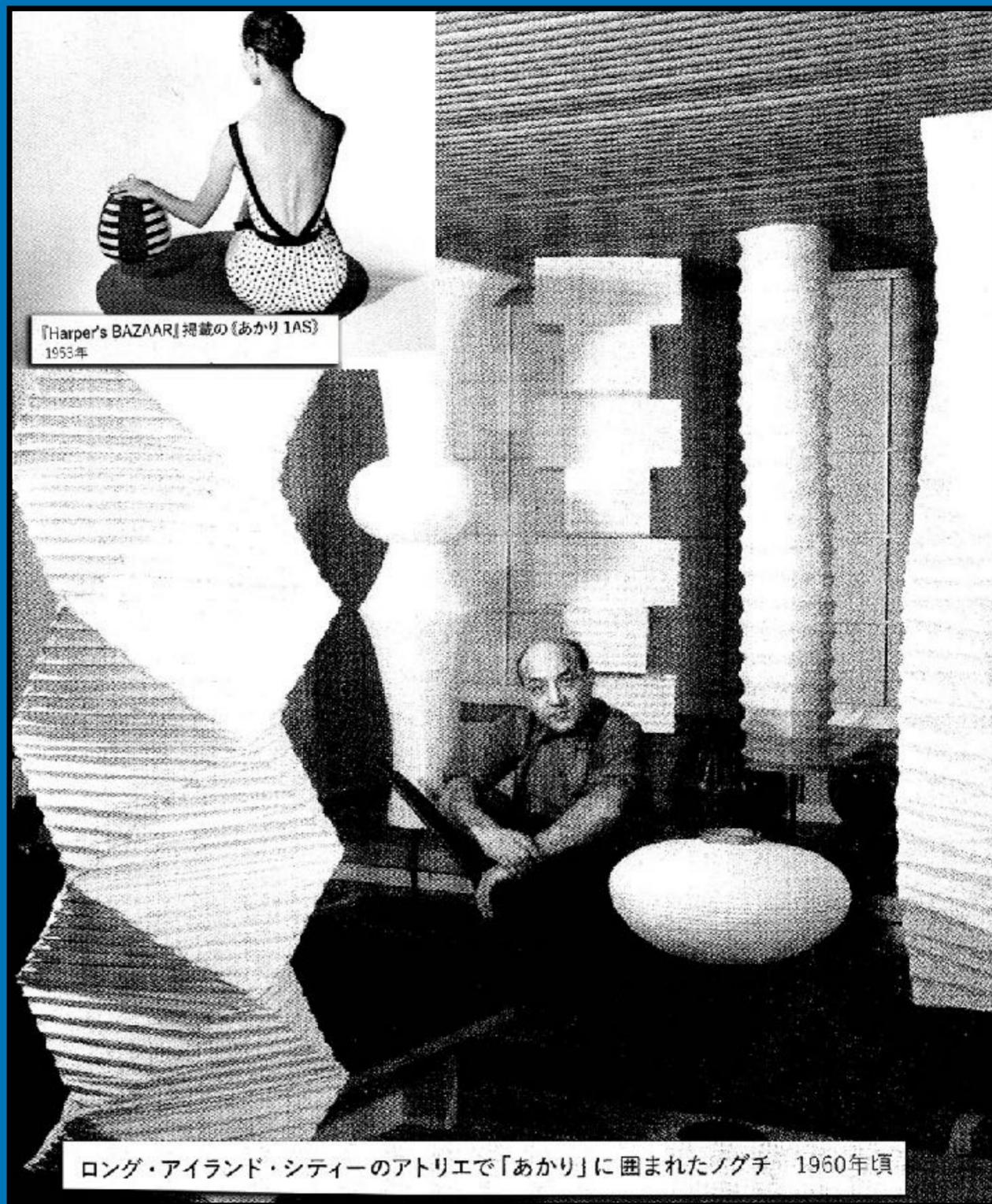
○ ノグチはかなり古い時代の、日本の素焼きのカップを持っていて、そこから着想を得ている。受け皿は野口の独創で、更にヤジロベエのようなナイフやフォークもデザインしている。

○ チェスの駒は、マーササーグラハムの舞台装置の試作をしていたものの展開の一つ。紙製のものもあり、紙を切り込み細工をしながら、平面から立体への舞踏的運動が感じられる。

1950年~1965年(46~61歳)

出会うの人、ノグチ<日本/伝統/モダン>

あかり



○**光の彫刻「あかり」**・・・ノグチは日本の伝統的なお盆の仏壇飾りでもある岐阜提灯を、「光の彫刻」に展開した「あかり」のデザインを行った。**20年かけて、実に200もの製品が生まれた「あかり」**は、今日、日本発信の最も成功した世界ブランドとして君臨している。ノグチは「日本の伝統」について、こうした実物の仕事で答えを出した。

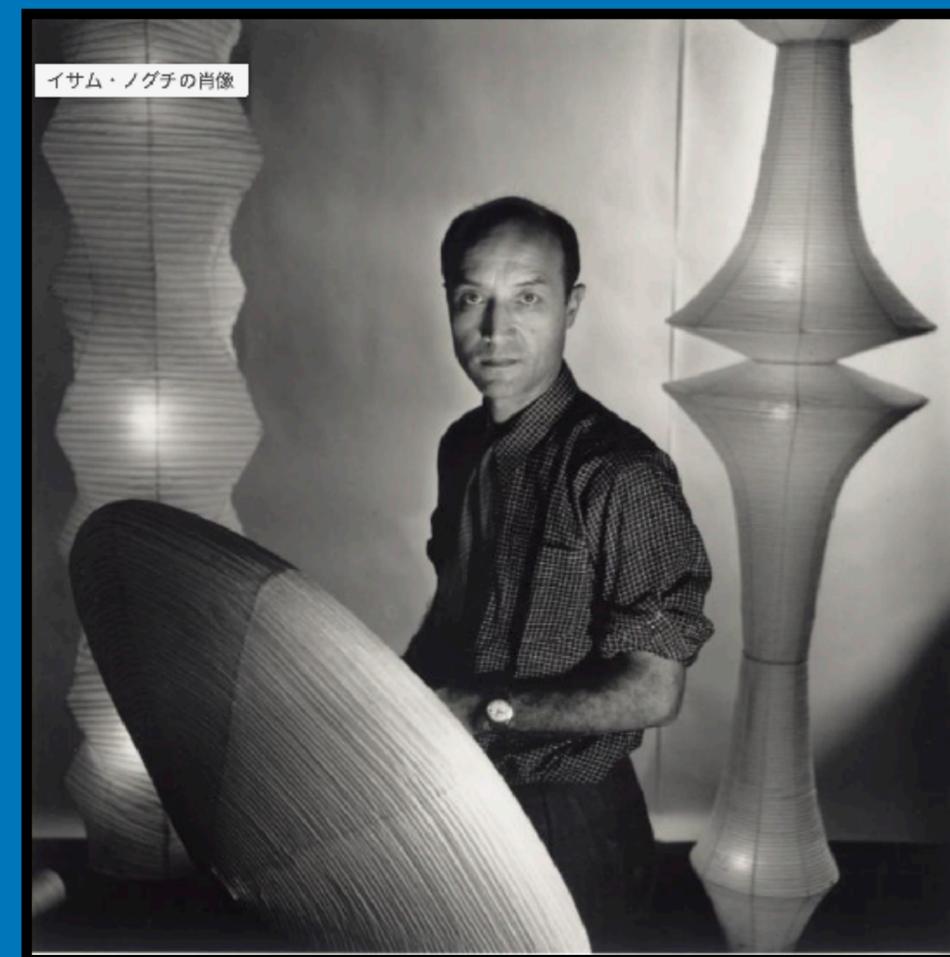
1950年~1965年(46~61歳)

出会いの人、ノグチ(日本/伝統/モダン)

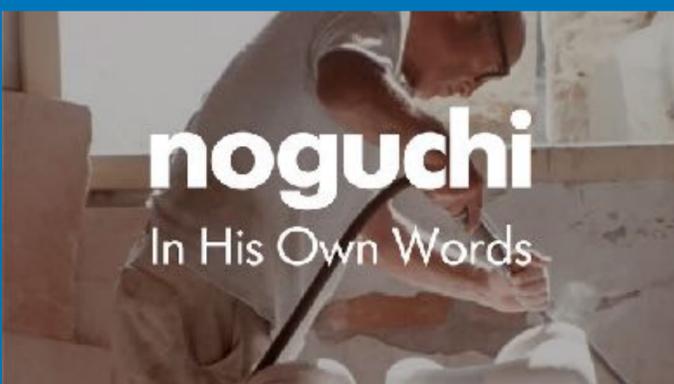
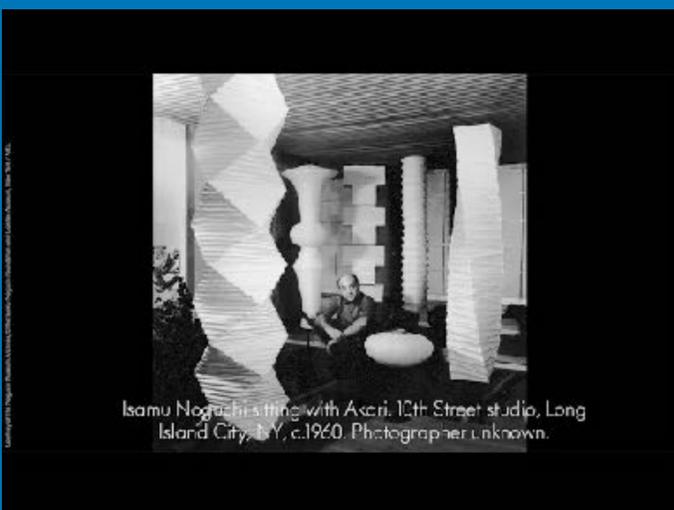
家具・照明

イサム・ノグチ庭園美術館

The Noguchi Museum

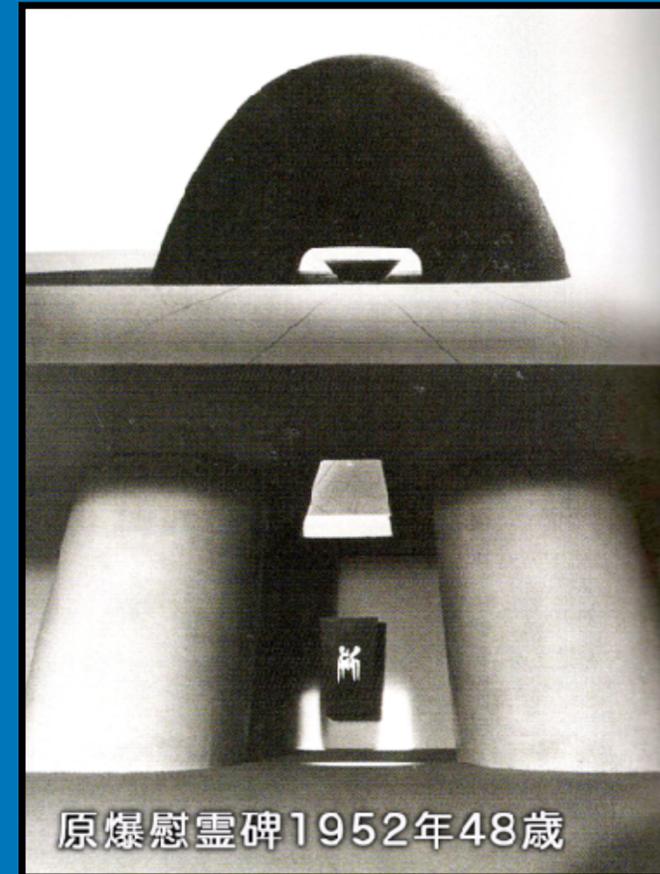
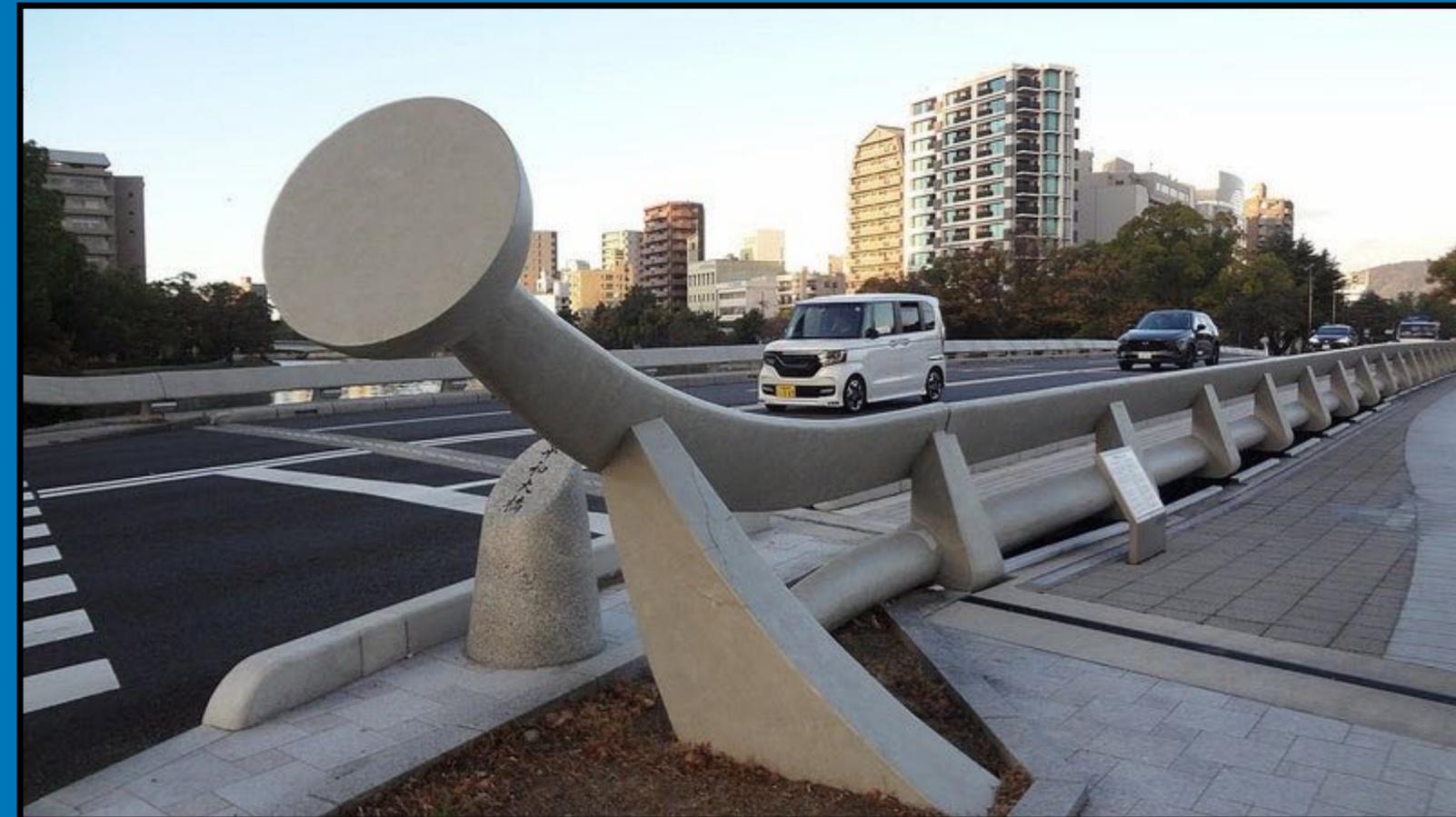


「照明の新しい形：彫刻家のランプは薄暗く、装飾的である」 LIFE 32巻10号 (1952年3月1日)



1950年~1965年(46~61歳)

出会いの人、ノグチ  
—日本/伝統/モダン—



原爆慰霊碑1952年48歳



平和大橋  
コンクリート製親柱1本に亀裂

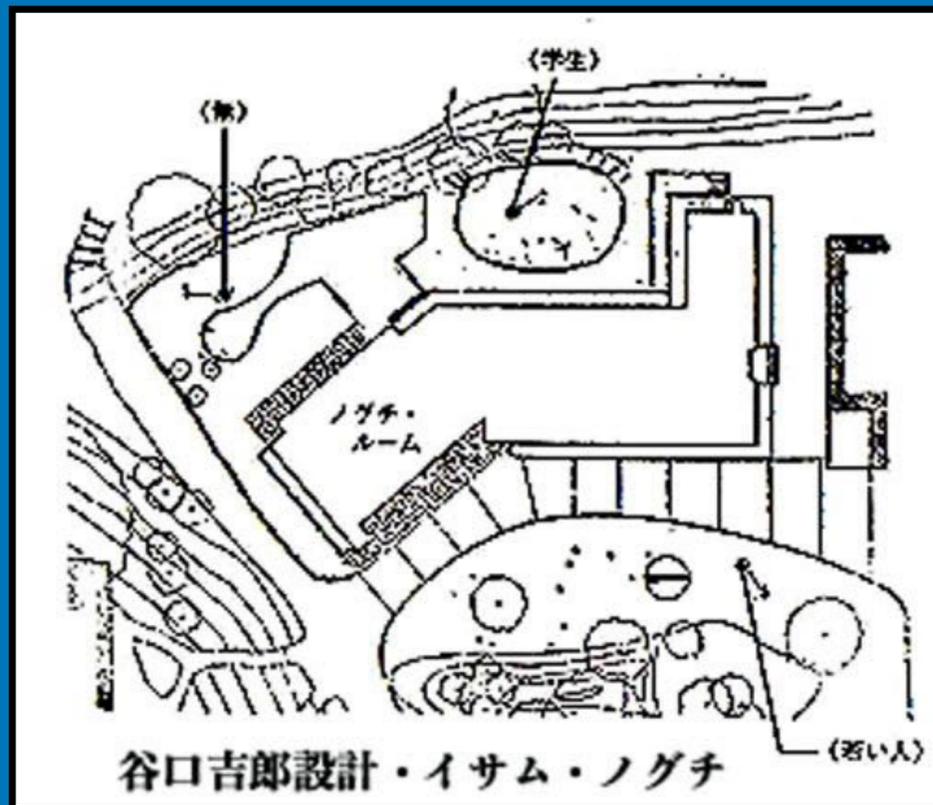
○彫刻家イサム・ノグチは、広島平和記念公園の平和大橋が、実現しましたが、園内の慰霊碑案も提出したものの、**アメリカ人という理由で不採用となり、「幻の慰霊碑」として知られています。**彼の慰霊碑案は家形埴輪や爆風のきのこ雲を思わせる力強いデザインでしたが、現在のアーチ型慰霊碑とは異なるもので、日米両国のルーツを持つ彼ならではのメッセージが込められていました。

○今日、実現され、残っているのは、**丹下健三がデザインした、弥生の埴輪の馬の鞍**のような屋根をかけた造形の慰霊碑だ。それと比べてもノグチの提案はいかにも強烈で大胆である。地上に出ているのは一部で、その太いチューブのような両足は、地面を貫いて地下深くなるほど大きく根づいて**巨大な恐竜の胴体**のようだ。ノグチの母体愛や母性愛、胎内回帰的造形を指摘するものもあるが、地面を境にしたチューブ状の円環、あるいはその一部を思わせる形は、ノグチ造形の基本ボキャブラリーでもあった。

1950年~1965年(46~61歳)

出会いの人、ノグチ(日本/伝統/モダン)

新萬来舎構想の実現に向けて



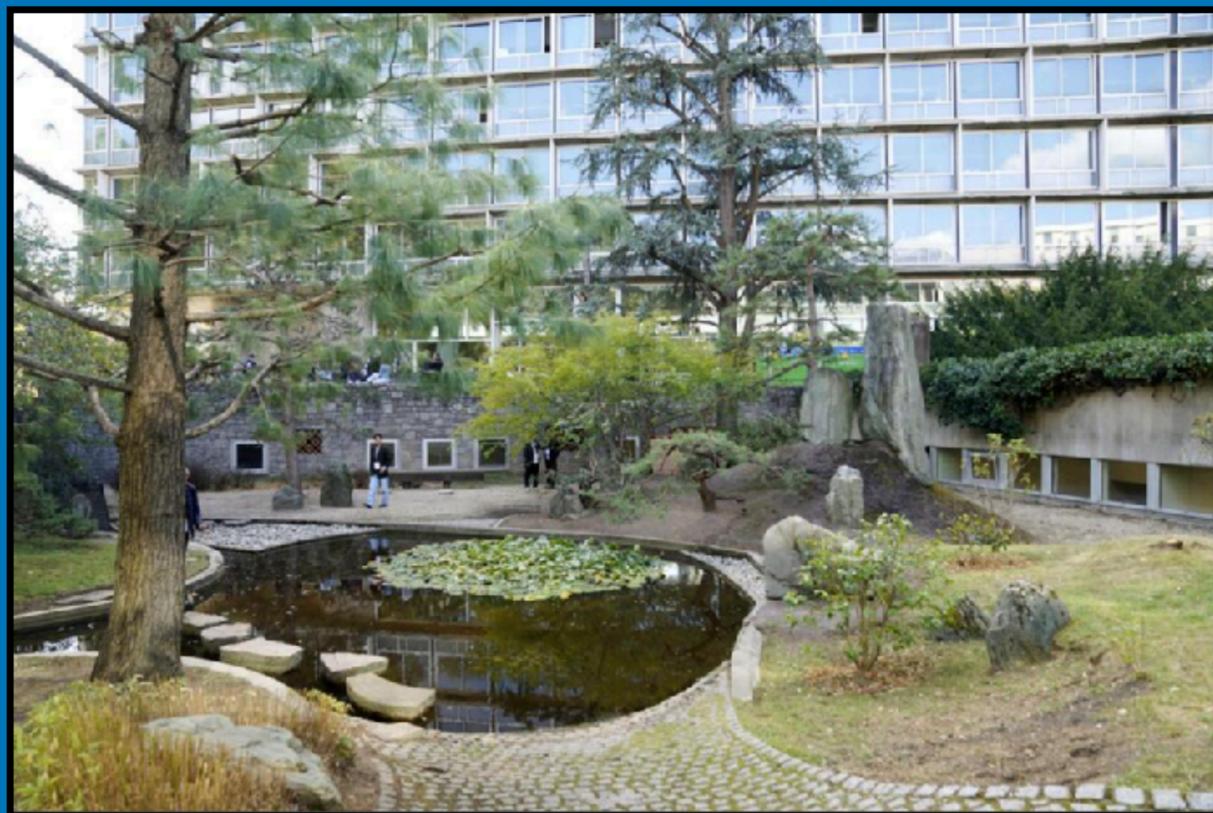
○ ノグチが設計したインテリア作品として、間違いなく最高傑作に値するもの。新萬来舎は英文学の教授を務めた父米次郎の記念室でもあり、教職員の談話室としても利用された。全体を設計した建築家、谷口吉郎(たにくち・よしろう)との協働によるもの。床面を庭側の下から、石張り、板フローリングに分けて、さらに大きくカーブする御座敷(ござしき)の小上がりを設けた。真ん中に暖炉があり、小上がりには白い大きな床と、瀬戸で焼いたスクラッチの陶板壁、片方は小さくアルコーブを開けた黒い壁とした。



○ この《無》も、「ノグチ・ルーム」の庭園のために制作されたイサム・ノグチによる彫刻作品である。この作品の原型は1950年の展覧会の時点ですでに完成していて、イサム・ノグチが庭園に必要であると考えていた「石燈籠」として構想されている。触手がぐるぐるを巻いた形状の《無》は、ノグチが考えていた周辺環境と彫刻の調和という概念を最も反映している。

1956~58年(52~54歳)

パリ・ユネスコ本部庭園



パリ  
ユネスコ本部  
の庭園

日本式庭園  
重森三玲

○ル・コルビュジェ案が通らず、ルイジ・ネルヴィによって建てられた本部には、アレキサンダー・カルダーの壁画などがあり、また今日では安藤忠雄の増築による「瞑想の部屋」なども設置されている。パリにおける20世紀デザイン、建築、美術の総合性を広く表明する場でもあり、ノグチの戦後の大きな仕事の始まりの一つ。大きくは、建物のベランダ的な部分の石によるデザインと、その下の、池泉（ちせん）回遊式の日本庭園に分かれる。重森三玲の依頼で、京都の佐野藤右衛門（とうえもん）などがパリに滞在して手伝った。



イサム・ノグチ〈パリ・ユネスコ本部庭園〉  
1956\_58年(52-54歳)

# 思い出を呼び覚ます装置

こども  
の国

# イサム・ノグチと公園づくり



子どもの国 丸山 1966(62歳) 神奈川県横浜市

○ 《オクテトラ》は、イサム・ノグチが制作したプレイスカルプチャーで最も知られたものです。ギリシャ語の8=オクトと4=テトラを組み合わせて《オクテトラ》と名付けられたこの作品は、六角形の面4つと三角形の面4つをあわせた八面体の彫刻で、中に入って登ったり、くぐったりすることができます。

○ 「スライドマントラ」とは、世界的な彫刻家イサム・ノグチが手掛けた滑り台を兼ねた彫刻作品の総称で、特に札幌・大通公園の黒い花崗岩の「ブラック・スライド・マントラ」が有名で、子供たちが遊ぶことで完成すると言われ、市民に親しまれています。これは、1986年のヴェネツィア・ビエンナーレに出品された白い大理石の「スライド・マントラ」が原型です。

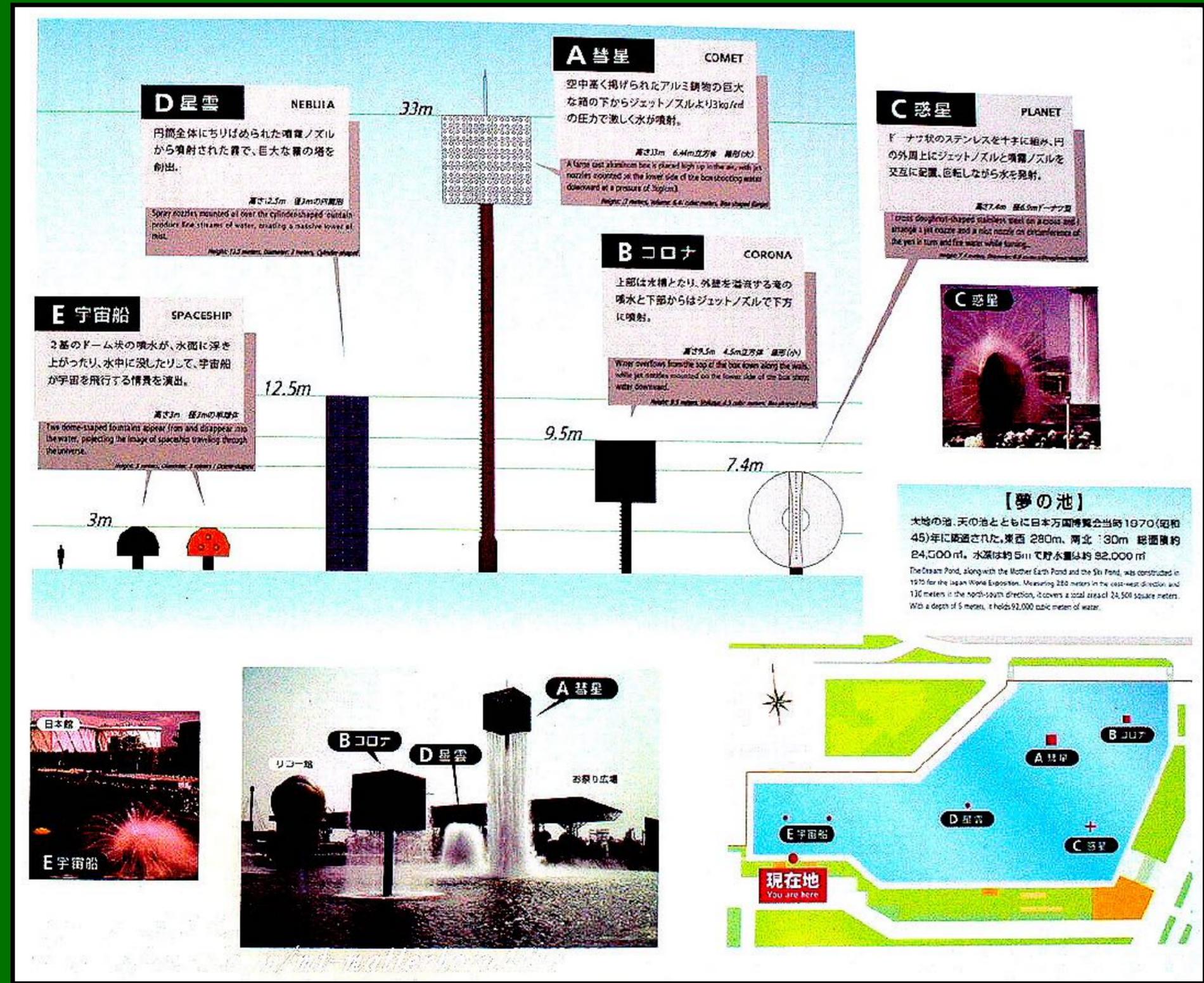
○ ノグチの中に根強くあった、子供時代の郷愁と、子供の状態そのものへの絶対的信頼。それは身体の記憶、彫刻の原点であることへの信仰告白のようなものだっただろう。

# 1970年代(65~74歳)

# 万博記念公園の取り組み

万博  
会場

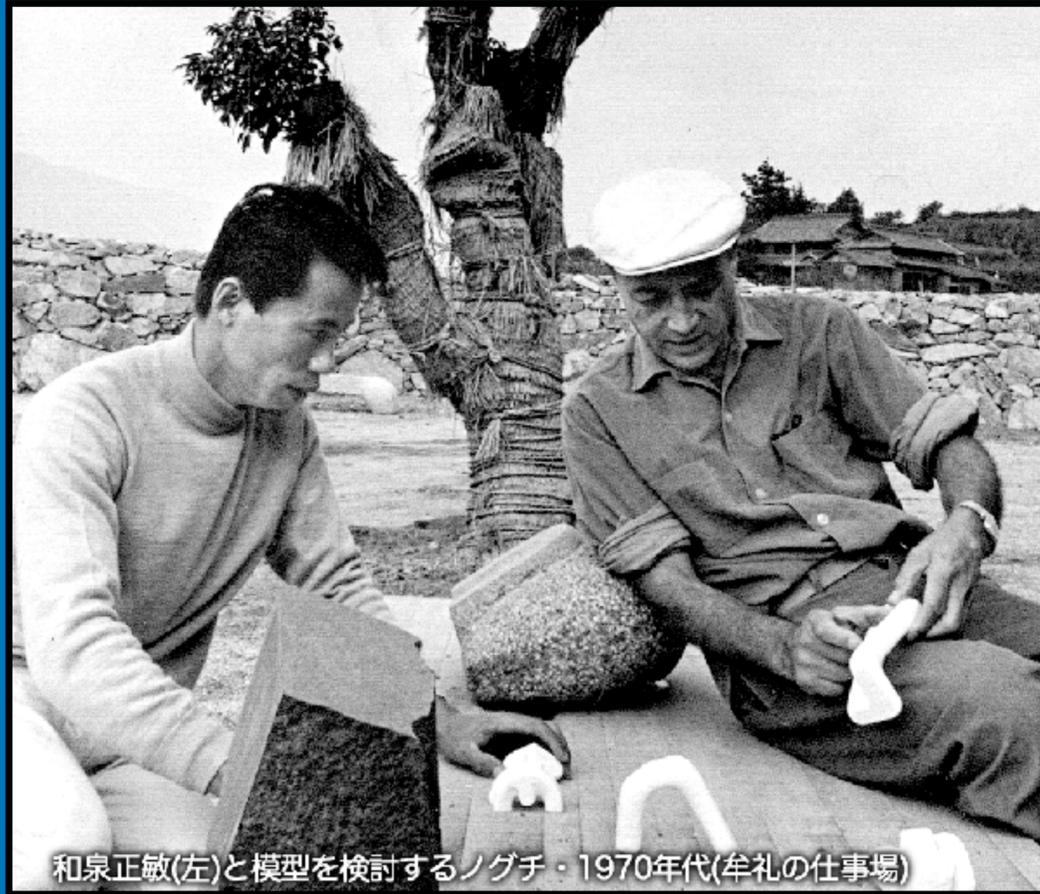
万博記  
念公園



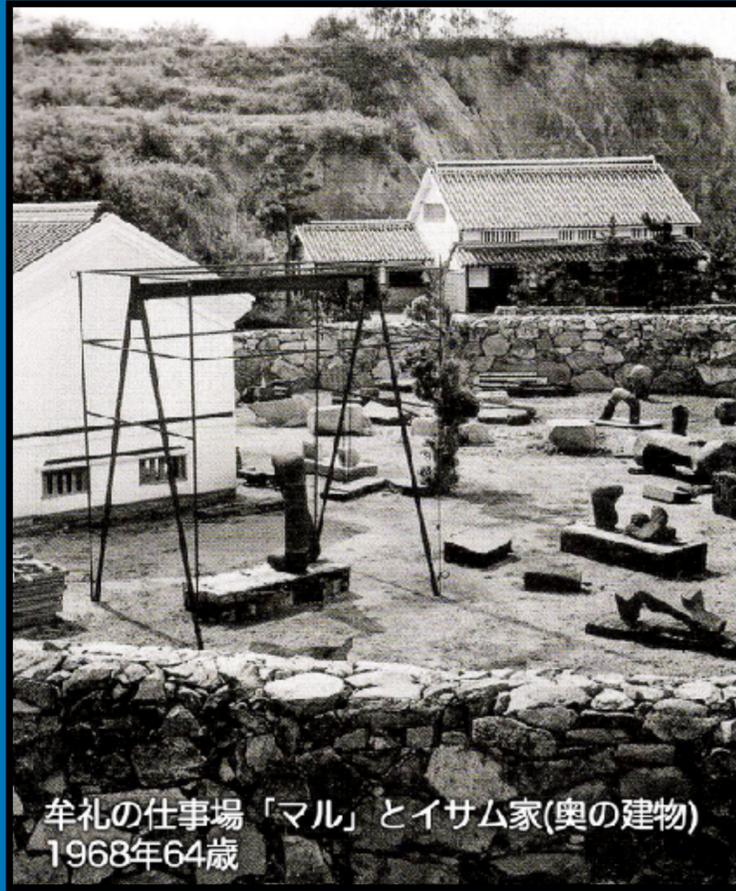
○ 夢の池の噴水・・・イサム・ノグチ作。大阪万博開催当時、「宇宙空間の夢」と題したオブジェ噴水群(6種9基)が造られ、現在は水が出ませんが、オブジェとして残っています。2011年3月に噴水群は、大阪万博開催当時の塗装色に復元しました。

1966年(62)~1988年(84歳)

石の人・ノグチ・前人未到の抽象彫刻へ



和泉正敏(左)と模型を検討するノグチ・1970年代(牟礼の仕事場)



牟礼の仕事場「マル」とイサム家(奥の建物)  
1968年64歳



エナジー・ヴォイド1972-73年68-69歳

○「地球を彫刻した男」のタイトルは、ノグチの仕事の全体像を表して、いかにもうまく言い当てていると思う。「大きいことが好き、規模、スケールの巨大なものに向かってゆく」生来のノグチの性癖もだが、宇宙生命や、地球の持っている悠久の時間への、人並外れた畏怖や尊敬が、その根にあったのは言うまでもないだろう。「いっしょに石の勉強をしましょう」。生涯の協働者、パートナーとなった若き石彫家、**和泉正敏との機縁**となったこの言葉に象徴されているノグチの態度は、年齢、実績、国籍、男女など、いっさい区別せず、真筆真剣に立ち向かう生来の純粹さを物語っている。

○展示蔵に入って左、南端壁に大きな板引き戸を設けた一角に展示してある。アトリエ最大、ノグチの石の単体作品でも最大、畢生（ひっせい）の大作である0作品タイトルは「エネルギーの中空」あるいは「渦巻く宇宙の力の真ん中のヴォイド＝空無」とでも訳されるかもしれない。ノグチは長らく、マンハッタンにこの3倍のスケールで設置することを願っていた（和泉正敏の述懐より）。

1966年~1988年(62~84歳)

石の人・ノグチ・前人未到の抽象彫刻へ



酒蔵を移築したリノベーションの傑作・展示室



真夜中の太陽1960年—70年代頃56-66歳



○ 展示蔵1階内部は東側に板引き戸を2箇所設けてある。左手前から入って、奥の南側の大きな引き戸の手前には《**エナジー・ヴォイド**》が置かれる。展示蔵は、現地の大工の手を煩わせて、**宇和島の酒蔵を移築**したもの。窓や引き戸を開ける位置など、それぞれにノグチ独特のこだわりや、ユニークなスケール感、方向感覚がいかに発揮されている、古建築の移築リノベーションの傑作とも言える。人に自作を見せるための、展示ギャラリーとして当初から構想されていた。2階には、大きな長い木の作業台、ブロンズ彫刻などがある。

○ **真夜中の太陽**・・・赤味を帯びた石と黒い石とが、交互に円を描き、**昼と夜、太陽と暗闇**とを連想させます。また、仏教、とりわけ禅に興味を持ち、**西洋と東洋の思想とを生と死は回り続ける車輪のようくり返すもの**、という東洋的な考え方を読み取ることができるかもしれません。そして中心に穴があいていながら、そこにボリューム感を見せようとする彫刻家としての挑戦も感じられます。

1966年~1988年(62~84歳)

石の人・ノグチ・前人未到の抽象彫刻へ



丸亀の豪商の家を移築1968年64歳



彫刻庭園 ミスの流れを表現した小石



○ 私道をはさんで「マル・仕事場」の東側、山の麓に位置する、住宅イサム家。1階にはたたきの土間、奥に井戸などがあり、右に二間ある。窓縁（まどべり）に向かう一間にはテーブル状の作品《空間のぞねり #2》が中央に置かれている。縁側の向こうの山側の石垣と竹林、苔の小庭にも、地面を這うものと、中くらいの大きさの石の彫刻2点がある。イサム家は江戸後期の丸亀の豪商の商家（武家の位を持っていたという）を移築したもの。小さいながら、奥の井戸の階段上には、檜の柵のような仕掛けもある。2階は書斎兼仕事場とその奥に小さな穴蔵のごとき寝室となる。

○ イサム家から、上の彫刻庭園には、石段と乱石（らんせき）による水の流れがあり、それを登り切ると、平らな庭園に出る。手前の崖の縁には、石舞台があり、右手奥に大きな長四角の花崗岩の上にアルミニウムの部分を載せた彫刻、奥には小ぶりの丸い玄武岩をかなりの数積んだ築山（つきやま）のようなものがある。芝生のように緑に覆われている巨大な丘、土盛りは頂上に向かって砕いた小石を敷いている。曲面をカーブに沿って斜めに登っていく部分は、さまざまな公園の造形に多用したノグチ流ランドスケープのユニークな手法。

1966年~1988年(62~84歳)

石の人・ノグチ・前人未到の抽象彫刻へ



「黒い太陽」1967~69年 国立国際美術館蔵

○イサム・ノグチの「黒い太陽」(Black Sun)・・・1967年63歳から69年65歳にかけて制作された花崗岩製の彫刻作品で、中心に穴の開いた円形の形態が特徴です。国立国際美術館(大阪)に収蔵されており、香川県の石匠・和泉正敏氏との協働で生まれ、東洋の思想や自然への眼差し、彫刻の根源を問い直すノグチの制作姿勢が凝縮された記念碑的な作品として知られています。

○高度の熱量で動き蓋くも恐竜の舞踊のような運動性・・・黒い太陽1969年ほぼノグチにとっては初めての、大型の石彫作品であり、牟礼を訪れたノグチが最初に和泉正敏に制作を依頼した仕事。いくつかある太陽のシリーズでも傑出してダイナミックな力をたたえた名作。シンプルに円形を象った作品とは異なり、その不定形な歪みや膨らみが、最高度の熱量で動き衰(うごめ)く、あたかも恐竜の舞踊のような運動性を感じさせる。後の《エネルギー・ヴォイド》に通ずる造形思想があるが、《エネルギー・ヴォイド》の静語感に比べると、むしろこの仕事のほうが、よりダイナミックとも感じられる。

1988年~2005年(81~84歳-故人)

最後の公園計画のイサム・ノグチ

モエレ沼  
公園設計

モエレ沼  
公園施設

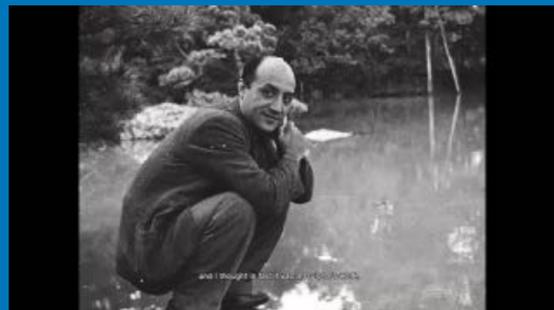
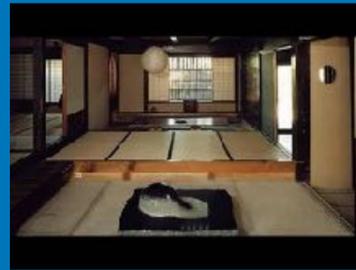


公園の下見をするノグチ(1988年・84歳)



○ この公園事業に強い関心を持ったノグチの期待に応え、**札幌市は公園の設計を委託**。「公園全体がひとつの彫刻作品」という考え方がノグチから提示され、周辺の環境や景観との調和をはかりながら、**ダイナミックな地形造成を行うというマスタープラン**が、瞬く間に形づくられていったのです。

# YOUTUBE



○ 本日のテーマはどうでしたか。  
ご感想お聞かせください。

<https://www.noguchi.org/>

○ 次回のテーマのご要望を承りますので、  
忌憚なくお話してください。

○ また次回お会いできますこと、  
楽しみにしています。